



# 西 山 瞳

(ファツィオリピアノフォルティ社長)

# パオロ・ファツィオリ

(ジャズ・ピアニスト)

対談

ファツィオリ創業者  
パオロ・ファツィオリの  
考えるピアノ哲学



現代最高峰のピアノとして賞賛され、ハービー・ハンコックら多くのピアニストが愛用するイタリアのファツィオリ。その工房は、イタリア北部のサチーレにある。幼い頃からピアノに対する強い関心を抱いていたという創業者のパオロ・ファツィオリは、家業であった家具製作のノウハウと、木材加工についての科学的な知識を身につけ、彼が理想とする音色を宿した新たなグランド・ピアノを世に送り出した。その音は、世界的なピアニストと観客を魅了する。今回、来日した創業者のパオロ・ファツィオリと、ファツィオリを愛奏するジャズ・ピアニストの西山瞳が、その魅力について語った。

## 職人の情熱と優れた技術から 生まれる最高級ピアノ

—西山さんは、ファツィオリのピアノを好んで弾かれています。以前にもパオロ氏とお会いになられたことがあるそうですね。

**西山**：はい、2年前にお会いしました。こちらのショールームに遊びにきていたときに、パオロさんがちょうどいらして。

**パオロ・ファツィオリ**(以下PF)：私は、あなたのピアノが大好きです。とても素晴らしい。ピアニストによっては、弾くときに押さえつけてしまい音がきれいに出不いのですが、あなたは、柔軟性があってとてもきれいな音です。

—西山さんは、ファツィオリのどのようなところに魅力を感じるのでしょうか？

**西山**：私はエンリコ・ピエラヌンツィというピアニストが好きで、彼の演奏でファツィオリを初めて聴きました。

**PF**：彼は良い友達です。

**西山**：彼がファツィオリをよく使っていて、

そのイメージがありました。2006年か2007年頃、滋賀県の“さくらホール”というところにファツィオリのピアノが入っていて、それを弾いたらとても素晴らしかったんです。それから、なるべくレコーディングの機会には使わせていただくようになりました。“工業製品”という感じがなくて、ほんとうにハンドメイドでやわらかい音がします。私の出したい音はこれだと思ったので、自分のレコーディングで選ぶときにはファツィオリを使っています。

—パオロさんは、ご自分の理想の音があるとお話されていますが、どのような新しいピアノを求められて製作されたのですか？

**PF**：わたしにはアイデアと、音に対する自分のヴィジョンがあります。いうならば、それは自分がイタリア人ということからきているのかもしれませんが。イタリア人は、芸術、そして音に対しての好みを持っています。音に関していうと、イタリア人はクリアで、明るく、輝きのあるポジティブな音を好みます。ドイツの音とは、また趣が異なります。

→今回、西山瞳がレコーディングに使用した東京「山久アヴェニュー・ホール」の「F228 Silver」

※写真提供：  
ディスクユニオン



—なるほど。

**PF**：偉大なピアニストであるフリードリヒ・グルダの、ファツィオリへのコメントを引用したいのですが、彼はファツィオリを、「気高い音」と賞賛してくれました。グルダ自身はドイツ人で、ドイツの音楽教育を受けているにもかかわらず、やはりファツィオリの音が違うということに彼は気がついてくれました。

—西山さんは、ファツィオリを弾かれて、なにに演奏に変化はありましたか？

**西山**：ファツィオリのピアノは、何もストレスを感じません。歌うような音色を出します。そして、日本人の技術者である越智晃さんの力もとても大きいと思います。なんといっても越智さんの調律はほんとうに素晴らし



PAOLO FAZIO LI

く、ショパン・コンクールでも活躍されています。イタリアの技術者でなく、彼に全面的に調律を任せられた理由をお聞かせいただけますか？

**PF**：それは、彼が最高の技術者だからです。越智さんの複製が世界中にいたらどれほど素晴らしいことでしょうか(笑)。

**西山**：私は越智さんにお会いしてから、ピアノの調整をすることの価値観が変わりました。それまでは、技術者の音を聴いていたんだということをすごく感じました。良い調律師といわれている方のチューニングを聴くと、その楽器本来の音というものを感しました。

**PF**：技術者は、技術に対してのアイデアを持ち研究しますが、越智さんは特に、その研究熱心さ、自分の頭で作り出し考え出すという部分がとても優れている技術者です。

—先ほど演奏を聴かせていただきましたが、とても音量がありました。コントロールは難しくありませんか？

**西山**：友人のクラシックやジャズのピアニストは、ファツィオリは難しい楽器だと言います。でも、それは弾いたことがなく、知らないからそう言っているだけだと思うのです。私が最初に弾いたときは、「なんて自然な楽器なんだろう！」と思って感銘を受けました。

**PF**：良いピアニストは、彼女と同じことを言います。弾きやすい楽器だと。ハービー・ハンcockもファツィオリを使っていますが、どんなパフォーマンスでもファツィオリを使いたいとリクエストします。ですが、そ

→第4のペダルが装備されたファツィオリ・ピアノの最高峰「F308」



れはときには難しいこともあります。場所によっては、ファツィオリが用意できないところもあるので苦労するところです。

—西山さんは、同じ演奏家としていかがですか？

**西山**：やはり、一度弾くと使いたいで、なるべくピアノを中心にレコーディング場所を選んでいきます。今回のソロ・アルバムもファツィオリを使っています。東京・仙川ヴェニュー・ホール“ve quanto ho.....”というところにある、F228 Silverというモデルで、前回のアルバムでも、やはり同じ「Silver」が入っているスタジオを借りて行なっていました。

**PF**：今度はイタリアのサチーレにもぜひいらして、録音してください。

**人々を魅了する音は理想とそれを後押しする仲間によって作られる**

—西山さんは、これまでもいくつかのモ



デルを使われていらっしゃるんですが、仙川ヴェニュー・ホール“ve quanto ho.....”のSilverには、ファツィオリの大きな特色でもある「4番ペダル」がついていますね。

**西山**：「4番ペダル」は、アクション全体を動かすぶん、ややヘヴィですが、連打をするときにはとても弾きやすくなります。

**PF**：「4番ペダル」は、最も大きなモデルであるF308で1987年に紹介したのが最初です。これは私のアイデアですが、開発自体にはそれほど時間はかかりませんでした。会社のなかには、常に技術的な改善を考えるチームがいますの

で、この「4番ペダル」も私にとってはそのなかの一環という位置づけです。この「4番ペダル」では、ふたつのことを同時に行なっています。ハンマーを上げるのと、キーを下げるということをしているので、重くなってしまいません。「4番ペダル」を踏んだときには、ハンマーは弦により近づくので、音のクオリティは変わらずに音量を抑えることができます。また、ピアニストにとってこのシステムの興味深い事柄として、通常より距離が縮まることで、速く弾いたり、グリッサンドをしたりするときにより弾きやすくなります。

—ファツィオリのこだわりはなんといってもそのサウンドですが、人々を魅了するその音色の秘密とは？

**PF**：これというひとつのものではなく、ファツィオリの音の裏側には理想があり、人の考えがあり、そしてそれを後押ししてくれる仲間たちがいます。

—西山さんは、ファツィオリの音をどのように感じられますか？

**西山**：大らかな音色です。他の偉大なピアノは、ベンツなど“高級車”のイメージですが、ファツィオリは、“馬”。パートナーとして、いっしょに演奏できる気がします。

**PF**：あなたはきっと良いフィーリングを見つけたのですね。そうであれば、きょうまくいきます。

—ファツィオリのピアノで、どのような音楽を表現されていきたいですか？

**西山**：できるかぎりレコーディングではファツィオリを選べたらいいのですが、なかなかまだ台数が少ないのが現状です。良い楽器ですので、もっとたくさん知られて、レコーディング・スタジオにも入ったらいいと思います。私自身は、やはり楽器といっしょに成長したいですね。ジャズ・ピアニストの場合、毎日演奏する場所が違って、毎日楽器が違うので、そのときにどれだけピアノと友達になれるか。ピアノと友達にならないといけません。今は年に何回かしかファツィオリを弾く機会がないので、もう少し増やしていければ、またイメージできる音が変わってくるのではないかなと思っています。

**PF**：私たちも努力したいと思います。世界各国の急激な需要の増加で生産が追いつかないのですが、生産設備を整えて、より良い品質の楽器を提供したいと思います。 ■



HITOMI NISHIYAMA